

天候不順とカキ身入りとの関係

岡山県では沿岸 7 漁協でカキ養殖が行われており、本県における重要な水産物のひとつとなっています。持続的なカキ養殖のためには、カキの成育と漁場環境との関係を長期的にモニタリングし、生産が好不調となった要因をしっかりと把握しておくことが重要と考えられます。ところで、H29 年度漁期は一部の漁協で生産初期の身入り（殻の大きさに対するむき身の大きさ）が遅れたものの、12 月下旬以降は順調な生産が行われました。そこで、水産研究所で実施しているモニタリング調査データを基に、H29 年度の A 漁協で身入りが遅れた要因について検証を行ってみました。

一般的に、カキの身入りが遅れる要因として、①水温が順調に下がらない、②病気、③付着物が多い、④過密養殖、⑤餌不足、などの要因が考えられます。

以上の項目を順次検証すると、①連続観測調査の結果、水温降下の遅れはありませんでした。②病気についても簡易診断を行いました。異常はありませんでした。③付着物の量も例年並みでした。④種苗密度については、漁期後期は例年を上回っていたものの、コレクター 1 枚あたり 20 個前後であったため、問題はないと考えられました。⑤餌となる植物プランクトンの量を示すクロロフィル量については、過去 2 年と比べ、生産初期（10～11 月）は少なかつたうえ、ピークの出現時期が遅れていました（図 1）。また、身入り率も生産初期は過去 2 年と比べて下回っており（図 2）、クロロフィル量と同調する傾向が見られました。さらに、今年度は 10 月の台風および長雨の影響で日照時間が少なかったため（図 3）、養成漁場における植物プランクトンの増殖が抑えられたと考えられました。

以上のことから、天候不順によって生産初期における餌不足が生じ、生産初期のカキの身入りが遅れた可

能性が高いと考えられました。一方、12 月以降はクロロフィル量が増加し、養殖現場の実感と同じく、身入り率の回復が見られました。このことが順調な生産につながった要因と考えられます。

このように、モニタリングデータを活用しながら、好不調の要因を科学的に分析し、今後のカキ安定生産に寄与していきたいと考えております。（開発利用室：村山）

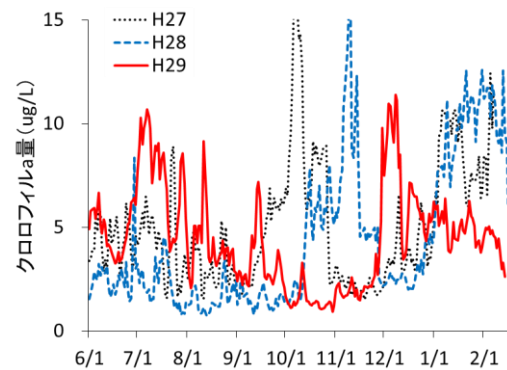


図 1 クロロフィル量の推移

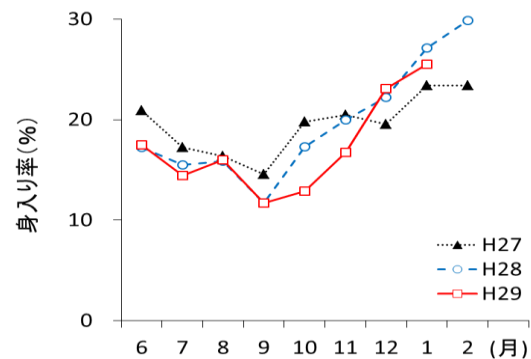


図 2 身入り率の推移

※身入り率 = むき身重量/全重量 × 100

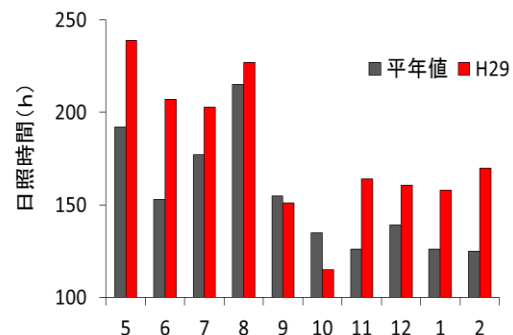


図 3 日照時間の推移

※平均値: H2~22 年の平均値